

学校だより



市川市立平田小学校

～共に学ぶ 共に育つ 共に感動する そして共に幸せ～

いなほ  
稲穂

学校教育目標

夢をもち、たくましく生きる  
子どもの育成

No.13

令和4年9月22日

校長 蜂須賀 久幸

<https://ichikawa-school.ed.jp/hirata-sho>

## ことわざや慣用句を知る、そして使うことから

3,4年生の国語では、「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと」が学習指導要領に示されています。これらを会話や文章にうまく取り入れると、話がおもしろくなったりイメージを膨らませたりできるなど、効果的だと考えます。

では、「逢うは別れの始め」「阿吽<sup>あうん</sup>の呼吸」「青菜に塩」「明日は我が身」「雨降って地固まる」「案ずるより産むが易し」に共通することは何だと思えますか？答えは、すべて“ア”から始まることわざ・慣用句です。これらはほんの一部。辞書には、その数4万以上と言われます。その中には、知っていることわざやほとんど耳にしなくなった言葉などがたくさんあります。

こうしたことわざ等を知ると、人生の知恵や人情の機微が圧縮されていて見事であることに気づきます。ただ、昔から伝わる言葉ですので、相手に伝わらないものもあるかもしれません。

我々教職員は、よく「下駄箱」という言葉を使います。おたよりなどに見つけると、真っ先に赤ペンを入れてしまいます。「下駄」を履いて登下校する子はいないにもかかわらず、これまでの習慣から「下駄箱」と言ってしまう。やはり、「靴箱」「下足入れ」が無難です。

ですから、「下駄を預ける」と言われてもピンとこない人の方が多くなっていると思います。ましてや、江戸時代に博打打ちが十手を預かり、同じ博徒を取り締まる捕吏を兼ねていたことから生まれたという「二足の草鞋(わらじ)」と言われても???ほかに、糠床(ぬかど)で漬物を作る家庭が珍しくなった現代では、「糠に釘」ってイメージできないかもしれません。同じようなものに「藪(やぶ)から棒」「子は鋌(かすがい)」「針の筵(むしろ)」「濡れ手に粟(あわ)」「鎬(しのぎ)を削る」など、それが何なのか理解できないといったことがあるように思います。



そこで、本校職員にアンケートを実施しました。結論から言うと、傍線部分のイメージや慣用句の意味については、年代による大きな差異は見られませんでした。「下駄を預ける」「子は鋌」の2つは、20代に「わからない」と回答した人が多くいました。また、「鎬」はどの年代もイメージしづらく、「鋌」「筵」といった言葉では40代以下の4割がそのモノ自体をわからないといった状況でした。日常生活で目にする機会がまずありませんから当然かもしれません。

私も、我が家に二人目の子どもが産まれてすぐ、人から「一姫二太郎でよかったね」といわれ、「女1人男2人の3人兄弟姉妹じゃないのに?」と思ったことが思い出されます。子を持つには最初は育てやすい女の子で、次は男の子がよいという意味であることを知ったのは、それからしばらくしてからのことでした。

慣用句やことわざの中には、世の中が変化することで、意味が変わってきたものもあるようです。例えば、「犬も歩けば棒に当たる」は、もともと“でしゃばるとひどい目にあう”ことを意味していたそうですが、今では、“何かをやっているらば意外な幸運に出会う”というように意味が反転しています。

もしも聞き慣れない言葉、あやふやな言葉があった場合は、①意味をきちんと調べてみること、②意識して使ってみることを子どもたちには勧めたいと思います。そうすることで、きっと理解が深まります。そして、結構大切な教えがいっぱいあることに気づくかもしれません。

通勤読書を続けるだけでも、初めて出会う言葉の数に驚きます。少しずつ涼しくなってきましたから、ゲームやYouTubeの時間を本や新聞に親しむ時間に少し充てて、ことわざや慣用語なども含めた語彙(ごい)を増やしていきませんか。きっと円滑なコミュニケーションの第一歩になるのではないかと思います。

参考；倫理研究所 丸山氏のコラム「どちらが本当か」

## 食育ってなあに？ なぜ食育が大事なの？

食育の必要性が叫ばれる要因として、朝食欠食や不規則な食事、塩分の過剰摂取、野菜の摂取不足など「食生活の乱れ」があります。また、肥満・生活習慣病や若い女性のやせ志向など「健康面の問題」も、大人になって改めるのでは遅く、しかも困難であると考えられています。そこで、「食」に関する知識とバランスのよい「食」を選択する力を身につけて実践できる力を育てていくことが、生涯にわたって健やかに生きるうえで重要であると考えられるからです。



小学校での食育は、給食の時間や家庭科の授業だけではありません。各教科や道徳科、保健体育、特別活動や総合的な学習の時間など、学校教育全体を通じて推進しています。ポイントは、(1) 食事の重要性、(2) 心身の健康、(3) 食品を選択する能力、(4) 感謝の心、(5) 社会性、(6) 食文化の6つ。

学校での具体的な実践に目を移すと、給食では県内すべての公立小中学校で11月に実施する、地場産物を活用した献立の提供「千産千消デー」(※地元でとれたものを地元で消費する「地産地消」を、千葉県の「千」に掛けて千葉県では「千産千消」とよんでいます)が挙げられます。また、関係団体・企業による出前授業も食育支援活動です。ヤクルト『おなか元気教室』やカルビー『朝ハロしよ！教室(朝食について考える)』を今年度すでに実施して、児童の意識を高めています。

「早寝早起き朝ごはん」と言われますが、7月の本校学校評価では、設問「規則正しい生活習慣が身についている」への肯定回答は79%(市平均85%)にとどまります。日本全体の朝食の欠食状況を見ても、小中高と進むにつれて割合が増えています。食欲がなかったり食べる時間がなかったりすることが主な理由ですが、「朝食を食べている」と回答している児童生徒のほうが、学力が10~15ポイント高いという結果も示されるくらいですから、「睡眠」と「食生活」を改めて見直す必要があります。

食育は学校だけで補完できるものではありません。上述の(1)~(6)について関係者・関係機関と連携を図って、家庭と一緒に子供たちの健やかな未来を築いていきたいと考えています。



### お知らせ

令和5年度4月より市内3つの小学校で、自閉症・情緒障がいの特別支援学級が開設される予定です。そのうちの1つが平田小学校となります。なお、本校に現在ある通級指導教室は、これまでどおりありますので併せてお知らせいたします。

特別支援学級への入級を検討あるいは希望される場合は、まずは学級担任や関係職員にその旨をお知らせください。必要なことについてお伝えできるように準備を始めています。

